日暮里に居る友人が訊ねて來た。應接間の火鉢の側でいろ〳〵な話をしたが、いつもアラ見る友人の奴め、火鉢の上の紫の藥罐を見つけやがつて、君にも似合はない貧弱だと云つて笑ふ。結局自分の方に新らしい鐵瓶があるからそれを貸さうと云ひ出した。鐵瓶を借りるのは證券信託をするやうなものだ、炭火でアクを取る、鐵のテリをつける、新らしいものより値打のある鐵瓶になる、そこを附込んだのが彼奴の附目らしい。證券信託と云ふのは五分六厘しか配當しない現金信託と違つて、凡そ六分見當に廻はる證券を預けて二分位の配當を取ると云ふのだ、兩方合せれば八分になる。だが今のところ利用者が少いので一萬圓から三萬圓までと限定して受託して居るやうだが、鐵瓶を預けて値打をつけさせようとするやうな心掛けの人が多く爲れば、この方も追々發展するだらう、こんな話から例もの利殖談になつた。彼奴この頃盛んに家作を造つて居る、自分が日暮里に住んで居ながら郊外へは絶對に家を建てない、そして其云ふことが振つて居る。郊外の家作は最初二割見當には廻るが、家がだん〳〵古くなると手入れに大へんな金がかゝる、賣るには賣れず、こんな馬鹿な話はない。その代り市内だと、家が古くなればなる程、借地權に値がついて來る。家賃などは取つても取らなくても宜い、市内の土地は大抵十年で二倍になる、十年倍と云ふと七分の複利も同然だ、と云ふのである。なるほど考へて見ると七分と云ふのが利殖の標準らしい。

友達が漸つと歸つたので、田舍の親爺を連れて丸ビルへ行つた。みんな素晴しい建物ばかりなので親爺目を廻はす。この土地は明治初年に岩崎さんが三十五萬圓で拂下げたところだが、今日では五千萬圓以上の地價になつて居ると云つたら開いた口が塞がらぬ驚きやうだ。東京の地所と云ふものはみんなさうかと云ふから、今の品川御殿山原六郎さんの邸は二萬坪からあるのだが、明治初年には五十圓でも買ひ手が無かつたさうだ、そればかりではない、今の岩崎家の別邸から森村男爵家の邸へかけて數萬坪の地面が矢張りそれだつたと云つたら、勿體ないと頻りに羨ましがつて居た、其續きの毛利公爵邸は、有馬侯の下屋敷だつたが、毛利家が千兩で買つたのださうな、總坪數二萬五千坪、今日の賣買では三百萬圓と云ふのだから驚く。

弟が行つて居る三田の慶應義塾の用地は時價何百萬圓と云ふのだが、福澤先生が拂下げた時はたつた五十圓だつたと云ふ。現在でも市外の地所へ着眼して、五十年百年後の成金を夢見て居るものが多いやうだが、京京の發展がどの程度で進んで行くかと云ふことが問題だ。

但し近頃は鐵道よりも自動車の發展が目覺しいから、自動車のスピードが一つの勢力範圍となるのは疑ひない。して見ると東京から四十哩までは一時間の支配地となる。二十哩の速力としても三十分で十哩までは地價の昂騰は免れまい。と推理的な話をしてやると、それなら俺の方の地面も滿更捨てたものではないなと胸算用をして居るやうだつた。

昭和五年十一月廿五日印刷
昭和五年十二月一日發行

現代貸殖全集 5
金一圓三十錢
岡辰大福帳

著作者　谷孫六
發行者　東京市日本橋區吳服橋二ノ五　神田豐穗
印刷所　京京市麴町區土手三番町二十九番地　春秋社印刷部
發行所　東京市日本橋區吳服橋二ノ五　株式會社春秋社
振替東京二四八六一
電話日本橋(24)自二二六七 至二二六九

次回配本は

金儲綺談

黄金街を行く

—新事業未來記—

ことはしないから、それだけは絶對に安心して居て吳れ給へ』

『まあ……？』駒太郎は更に驚いた。

それと同時に何となく淋しさを感じて來た。

東京へ着いたのは其夜の八時頃だつた。二人は東京驛から牛込の和田家へタクシーを驅つた。

和田と大澤と駒太郎と、三人鼎座の交渉は美事に成立した。和田が駒太郎に對する未練は、大澤と駒太郎との關係に依つて斷ち切られた。それから起る憎惡の念は、須磨の家族を引取らねばならぬ責任と、大澤の事業提供とに依つて、和田の氣持を荒立てさせることが出來なかつた。

大澤は和田家の安定を祝した。和田は駒太郎の獨立を祝した。和田と駒太郎は大澤の次なる事業に成功を祈つた。

好事業あり

大澤はその夜久し振りで麹町の自宅へ歸つた。けれども委しい事情は一切妻に語らなかつた。

そして須磨の近藤宛に、明日の特急で行くから、發明家を宿まで案内して置くやうに電報を打つ

エトアーク

黄金街を行く の一節

た。

妻のきく子は一向に落つかぬ大澤の容子に不滿だつた。忙がしいのは事業家の常だとは云ふやうなものゝ、脫殼のやうな家庭に居る淋しさをつくゞゝと訴へた。

『もう少の辛抱だ、いまに安心させるよ』

大澤は辯解のやうな、慰めるやうなことを云つて、訴へる妻の言葉を一々點頭いて居た。

その翌日、朝の特急で彼は神戸へ行つた。神戸のS旅館には近藤倉太郎と、發明家の井上不二也とが待つて居た。

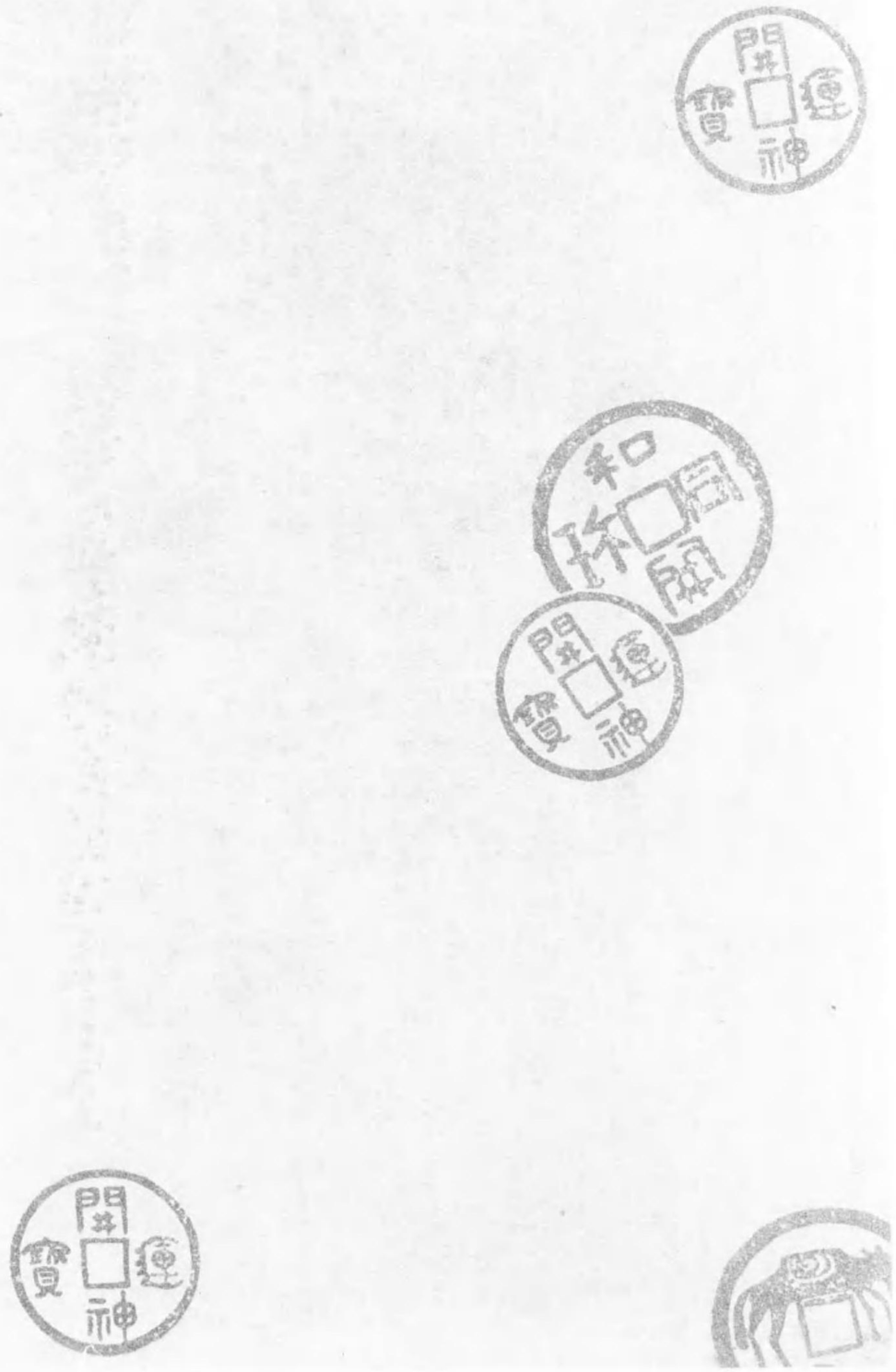
『私は大澤善八です、何分よろしく』

大澤の態度はすつかり變つて居た。彼が事業に臨む場合は、何時でも大資産家の物腰で、相手を呑んでかゝる調子である。眉と目の間に幅のない、鼻の尖つた、顎骨をピクゝさせる癖のある井上不二也は、大澤の容子を見てすつかり呑まれてしまつた。

大澤は態と笑ひかけるやうに充分な愛嬌を見せて、

『貴方の發明された金錢登錄器の特許權をお賣りにならうと云ふのですな』と口を切つた。

エトイテーフ



終